「編集」という名の思想
――劉清之の『戒子通録』をめぐって――

緒方賢一

要　約

In this essay, I reflect on thought of “Editing” in Southern-Song China. The Song Dynasty is a time when all phenomena changed dramatically. Books of Family Instructions were made at this time. The author is the Song Literati, Liu Qingzhi. He was a Neo-Confucian like a Zhu xi. He edited many books. *Jie zi tong lu* was one of them, and a one of many volumes of Family Instructions produced in Song China. This book was the very peculiar one. The notable feature of this book is that it rejects all systematization. Texts disperse, and lie one upon another in this book. And the author’s purpose was here. Liu Qingzhi was not a philosopher; he was an editor. He does not look to another philosopher; he was looking to readers beyond the book.

Keywords : 戒子通録・劉清之・家訓・編集・宋代社会

はじめに

本稿では，南宋時代（西暦 1127-1279）に官僚として，また学者として生きた劉清之（1134-90）と，彼が編集した家訓集『戒子通録』について考察する。始めに劉清之という人物について記述し，次いで宋代における家訓の出版状況を紹介し，最後に『戒子通録』という書物の特徴および，この書物にこめた劉清之の意図について述べる。彼の名は思想史的には，日本でも広く読まれた『小学』という書物を朱熹（朱子学の祖）と一緒に編纂した人物としてだけ知られている。今あえてこの無名と言ってよい人物に注目した理由は最後に至って明らかになると信じている。

1. 劉清之について

劉清之，字は子澄，号は静春先生。江西臨江（清江）の出身である。

上海図書館蔵『笪橋劉氏総譜』の記述によれば[1]，この劉氏一族は江西を中心に，代々科挙及第者を輩出する家柄であった[2]。子孫達も直系ではないものの，その後も綿々とその血統と家学を継承していたようで，明代以降にもこの劉氏を尊崇する人物がいたことが確認でき[3]，現代においても子孫達は祠廟を作り祖先の顕彰に努めている[4]。

『宋史』によれば[5]，劉清之は兄の靖之について学び，紹興二七年（1156）に進士に及第，袁

州宜春県主簿（帳簿をつかさどる官）を命じられるも赴任前に，父が亡くなる。喪が明けた後，改めて厳州建徳県主簿に任ぜられる。彼が任に就くと税と労役の不公平はなくなり，訴訟沙汰も止んだという。次いで吉州万安県丞（副長官）となる。一帯は日照りによる饑饉が発生していた。劉清之はあちこちを視察して民衆から詳しく事情を聞き，税と用役を減じ，常平米（米価を安定させるために貯蔵してある米）を減らすよう建議し，さらに穀物を大量に備蓄している家からそれらを買い取り，民に等しく分配するよう求めた。彼のこの事績は地方長官の龔茂良によって朝廷に報告され，諸公もこれを支持した。

中央から派遣されてきた発運使（穀物・茶・塩の売買及び財政をつかさどる）の史正志が劉清之に対して，はんぱな土地しか持たない農民から税を取り立てるよう求めたところ彼はそれを拒否する[6]。参知政事（副宰相）となった龔茂良は丞相である周必大（1126-1204）[7]とともに劉清之を当時の皇帝高宗に推薦する。推された劉清之は皇帝の前で，民の苦しみ，兵の奢り，役人たちの腐敗から語り起こし，さらに「用人（いかに人を用いるか）」について「賢否を弁ず・名実を正す・材能を使う・換授を聴く（才能に応じて任官する）」の四つが重要であると述べる。以後，太常寺主簿（尚書省六曹を補佐する九寺の一つ。礼学をつかさどる），母の喪が明けた後は鄂州通判（副長官），衡州に赴任（職位不明），光宗の時に知袁州（州の民政・軍事をつかさどる）をもって終わる。臨終の際には紹興年間の従臣である高閌（1131-62）の『送終禮』をもって葬礼を行うよう遺言を残す。彼の著した「諭民書」一編は，家族の和睦，身を慎んで他人を救うこと，婚姻や葬礼の大切さを説いたものであるが，言葉は率直にして簡明であり，個々の家にはこの一書が置かれていたという。不正には断固として反対し，常に民衆の側に立って任務を遂行する剛直な性格の人物が以上の記述からは浮かび上がってくる。後，清代に至って臨江に大成殿が重建された折には，劉清之も郷賢祠に祀られることとなる[8]。

学者としての劉清之の活動は，進士及第後，博学宏詞科を受験しようとするが，朱熹（1130-1200）に面会して今までの学問を棄てて義理の学を志す[9]。当時高名な儒者であった呂祖謙（1137-81）や張栻（1133-80）らと親しく交わり，道学者であり，吏部尚書（官吏の人事をつかさどる中央官庁の長官）であった汪応辰[10]や『續資治通鑑長編』全六八七巻を編纂した李燾らも彼を敬い慕っていたという。朱陵道院や槐陰精舎などの書院を建て，臨蒸精舎を増築し，そこで熱心な講学活動を展開し，学問のための場所の開発，後学への教育にも心を砕いた。呂祖謙や朱熹の書院で講義を行ったこともある。朱熹と陸九淵（1139-92）が数日に渉ってお互いの意見をぶつけ合った，歴史的に有名な鵝湖の会にも参加している。

朱熹と出会って科挙のための学問を棄てたと先にあったが，弟子となったわけではなく，友人として（劉清之は朱熹の四つ年下）交遊を続けていた。陸九淵は，やや地域は異なるものの同じ江西地方において講学活動を行っており[11]，『宋元学案』『宋元学案補遺』の記述によればお互いに弟子を紹介し合ったりもしていたようである。

劉清之の著書は『宋史』に記されているものでは，列伝においては『曾子内外雑篇』『訓蒙新書外書』『墨莊総録』『祭儀』『時令書』『続説苑』『文集』『農書』，そして『戒子通録』が，また『宋史』巻二〇四・芸文志三には「劉清之『衡州図経』三巻」とある。『朱子語類』巻一〇一・第二条には，程子の弟子達の文章を採集した『続近思録』を劉清之が編集したとの記述がある。元の王礼『麟原前集』巻九「静春先生伝」には，槐陰精舎にて行った学者との問答百余篇を集め

て『槐陰問答』と名づけたと記されている。また『文淵閣書目』には「劉子澄『玉淵文稾』一部三冊闕」の一文が確認できる[12]。

しかし今日，彼の著書は『戒子通録』以外すべて散逸して残らない。その著作を残す努力がされなかったのかまたは戦乱によって焼けてしまったのか，早々に失われてしまったようで，『宋史』より後の史書では『清史稿』巻一四七・芸文志三に『戒子通録』が載せられているだけである。

また残存する彼の詩文は『宋名臣言行録外集』巻十四に十二条，元の王礼『麟原前集』巻九「静春先生伝」にいくつかの発言，『全宋詩』に二五句，『宋詩紀事』に三つの詩が残る。また呂祖謙の『東萊別集』巻十には劉清之の書いた呂祖謙の追悼文が，魏了翁の『鶴山集』巻一〇五には「貢茅亭記」が，羅願の『羅鄂州小集』巻四には「鄂州張烈女祠堂碑」，清謝旻監修の『江西通志』巻一二四には「萍郷県学記」がそれぞれ採録されている。さらに『全宋文』巻五七九九には「請修復炎帝祠宇奏」と「河南穆先生文集跋」[13]「蒸湘岣嶁祠壇記」[14]が載せられている。

明末から清にかけて黄宗羲（1610-1695）らによって編纂された『宋元学案』は，宋・元代の学術系統をコンパクトに整理している書物として有用であるが，第五九巻には劉清之を筆頭とする「清江学案」が立てられている[15]。『宋元学案』という書物は後に失われてしまった文章を収めているという点で資料的価値を有しているが，劉清之に限っては上記の『宋史』『宋名臣言行録外集』からの引用が載せられているだけである。また弟子や友人達の著作の中にも劉清之に関する記述は存在するものの，事績の断片をうかがい知ることができるにすぎず，彼の学問内容を示すような文章を見つけることはできない。

彼の学問の内容や傾向については，以上の理由から詳しいことはわからない。散在する文章や発言の断片から推測するほか方法がないのである。

劉清之の基本思想は朱子学に代表される道学と一般的に考えてよいと思う。『朱子語類』には劉清之の「宋代では『太極図』『西銘』『易伝序』『春秋伝序』の四篇の文章だけがよい」という語が収録されている[16]。『太極図』の作者は周敦頤，『西銘』は張載，『易伝序』『春秋伝序』はともに程頤の文，いずれも北宋の道学者として南宋代に尊崇されていた人物である。だからといって彼が道学信者，朱子学信者であったわけではない。別の所では「学を志すならば，ただ性理学（＝道学）に関する書物だけを伝え味わったり，善き士大夫だけを慕ったりしているのでは，文章に目が眩んで，訓詁に溺れ，異教に流れる者と同じ轍を踏む[17]」とも述べている。道学だけを盲信する態度は偏っているというのである。また「真儒にひたすら従って徳業を考察する者は，名を好む者だ。経書の師は遭遇しえても，人間としての師にはなかなか巡り会えない[18]」とも言う。彼が朱熹や陸九淵と異なるのはこの点ではないだろうか。朱熹の理学にしても陸九淵の心学にしても，人間の，あるいは世界の真の姿とは何たるかを捉えるため，経書や心の奥底に徹底的に入り込むことを説いている。劉清之の場合は，彼らよりは現実の方にウエイトを置いているようである。彼が弟子の韓冠卿に語った「先生が弟子に伝えた教えは〈実〉の一字だった[19]」という言葉からもそれは窺えよう。

2. 家訓及び家訓集の出版と『戒子通録』

宋代には多くの家訓が出版された[20]。貴族社会の崩壊，科挙による官吏登用制度の全面的な導入，中央集権制度の確立などといった，唐後半から宋へと至る大きな社会変革の中にあって，宋代の士大夫たちは族譜を編纂し，義荘を設置するなどして，自らの一族の安寧と存続を目指した[21]。家訓編纂の流行もこれらの動きと連動している。科挙に及第して名家となった士大夫は，今後も家が没落しないよう子孫が繁栄してもらわねばならない。そのためには家族の結束がより求められることとなる。家訓の重要性が知識人の間に浸透していったゆえんである[22]。家訓の内容は多岐に渡る。直接自分の子孫を名指しして非常に具体的な訓戒をほどこすものがあれば，一般の読者を想定して一般的な道徳を説くものもある。宋代はまた「家訓集」が数多く編纂された時代でもある。主なものとして，呂祖謙『家範』，司馬光（1019-1086）『温公家範』，孫景修[23]『古今家誡』などが挙げられる。劉清之の『戒子通録』もそのような流れの中で製作されたと見てよい。家訓集とは，古今の家訓や子への戒めを綴った詩文から取捨選択して一冊にまとめ上げた書物である。家訓集のルーツは，唐代に欧陽詢らによって編纂された類書『芸文類聚』（巻二三・人部七・鑒誡）に求めることができる。ここには五経に始まり，諸子百家や漢代から魏晋南北朝に至る様々な家訓的な内容を持つ詩文が多数収録されている。『芸文類聚』のこの箇所は単に「鑒誡」を集めたものである。しかし後の家訓集を編纂しようという者が，この書中の「鑒誡」を参考にしたであろうことは想像に難くない。例えば『戒子通録』に引用されている魏の王肅の「家誡」という文章は『芸文類聚』以外の文献に全く見られない。劉清之が『芸文類聚』を参考にしたことは明らかである。

ここで四庫全書所収の『戒子通録』全体の構成を紹介しておきたい。かなり膨大な量になるが，後の論旨にも深く関係するので煩を厭わず載せる次第である。

・御製書宋劉清之紀左傳叔向母之事
・四庫全書提要（全文は以下の通り）

臣等謹案，『戒子通録』八巻，宋劉清之撰。清之字子澄，號靜春，臨江人。紹興二年進士。光宗時，知袁州。宋時本伝称其生平。著述甚多，是書其一也。其書博採経史群籍，凡有関庭訓者，皆節録其大要。至於母訓閨教，亦備述焉。史称其甘貧力学，博極群書。故是編採摭繁富，或不免於冗雑。然其随事示教，不憚於委曲詳明，雖瑣語碎事，莫非勧戒之資，固不以過多為患也。元虞集甚重其書，嘗勧其後人刻諸金谿。後崔棟復為重刻。顧自宋以来，史志及諸家書目，皆不著録。惟『文淵閣書目』載有二冊，亦無巻数。外間伝本尤稀。今謹拠『永楽大典』所載，約略篇頁，釐為八巻。所引諸条，原本於標目之下，各粗挙其人之始末，其中間有未備者，今並為考補増注，以一体例。惟自宋以前時代錯出，頗無倫次，蓋一時随手摘録，未経排比之故。今亦姑存其旧焉。乾隆四十六年九月恭校上。

・元 虞集（1272-1348）序〔執筆年不詳〕字伯生 蜀郡人

昔静春先生，輯凡為人父者之戒其子言，載書伝者，以為『戒子通録』，意其所以謂之「通録」者，豈不以天下之為人父者，各以其愛子之心，而為之戒。天下之為人子者，皆可因其所戒，而省念之。如聞其父之命，親在求諸容色辞気之接，而不能尽也。即此書以充其所未達，親没思其精神志意之微，而有不及聞也。即此書以徴其所欲，知一語黙動息，無非受命於其親者矣。天理寧有間断乎，集嘗得其書，而敬愛之，服行講明，不敢後也。他日至臨川，劉氏之族在金谿者多賢俊[24]，毎出其先世遺書，相示僕，嘅然問之曰，『戒子通録』無恙乎，有曰，儆叔熙者対曰，是吾世守以保族者也。敢忘之乎，集曰，子之家顕且二三百年，豈偶然乎。

・元 陳黄裳序〔大德庚子（1300）春〕眉山
・元 曽福昇序〔大德庚子秋〕廬陵
・元 崔棟序〔大德庚子十月〕河東

〔巻一〕全 47 章

『烈女伝・胎教』，『礼記・内則名子辞』，『儀礼・冠辞』，『儀礼・婚辞』，『戒書・周武王』，『漢 孝武』，『梁 簡文帝』，『周公』，『文儆伝 周書』，『書顧命 周成王』，『礼記・緇衣・葉公子高』，『魏武帝』，『戒子言 魏文帝』，『蕭嶷〔南斉〕』，『戒子言 光武帝〔後漢〕』，『勅後主辞 蜀漢先生〔劉備字玄德〕』，『帝範 唐太宗』，『戒皇属 国朝太宗類苑』，『論語・季子・陽貨』，『家戒 王粛〔魏〕』，『杜恕〔魏 字務伯〕』，『嵇康〔魏〕』，『戒子言 仲孫貜〔魯 大夫 孟釐子『史記・孔子世家』〕』，『文選・孫叔敖〔春秋 楚〕』，『欧陽地余〔前漢 元帝〕』，『厳光〔後漢 光武帝期〕』，『樊宏〔後漢〕』，『辛憲英〔後漢 辛毗 « 三国志 » 魏書巻二五〕』，『源賀〔魏『魏書』巻四一列伝二九〕』，『宋隠〔魏〕』，『向朗〔『三国志』蜀書〕』，『曹袞〔魏 曹操子〕』，『士会〔『左伝』宣公伝十七年〕』，『高漢筠〔晋〕』，『荀勗〔晋〕』，『戒子言 阮籍〔晋〕』，『崔冏〔北斉〕』，『牛宏〔隋〕』，『傅奕〔唐〕』，『房喬〔唐〕』，『閻立本〔唐〕』，『穆寧〔唐〕』，『張覇〔後漢〕』，『誨子弟言 朱仁軌〔唐〕』，『戒子孫言 王祥〔晋〕』，『李襲誉〔唐〕』，『姚崇〔唐〕』

〔巻二〕全 2 章

『顔氏家訓 顔之推〔北齊・北周〕』，『序訓 柳玭〔唐〕』

〔巻三〕全 31 章

『幼訓 王褒〔梁 王規〕』，『曽子 告子言 史鰌』，『司馬談〔漢〕』，『何曽〔晋〕』，『殷仲堪〔晋〕』，『謝僑〔梁〕』，『劉賛〔唐〕』，『疏広 告兄子言〔東漢〕』，『孔臧 戒子書〔漢〕』，『東方朔〔前漢〕』，『鄭玄〔後漢〕』，『劉向』，『司馬徽〔後漢〕』，『王修〔魏〕』，『王昶〔魏〕』，『諸葛亮 家戒』，『羊祜〔晋〕』，『商衒〔晋〕』，『司馬越〔晋〕』，『李暠〔晋〕』，『陳顕達〔宋・南斉〕』，『王僧虔〔宋・斉〕』，『徐勉 戒子書〔梁〕』，『玉筠〔梁〕』，『李恕〔唐・中宗〕』，『姚信〔梁〕』，『楊椿〔北斉〕』，『馬援〔後漢〕』，『楊侃〔斉〕』，『張奐〔漢・霊帝〕』，『石奮 責子言〔漢〕』

〔巻四〕全12章

『命子詩疏 陶潜〔東晋〕』,『示子詩 杜甫〔唐〕』,『韓愈〔唐〕』,『寄子詩 盧仝〔唐〕』,『謂子言 賀敦〔隋〕』,『与子弟書 韋世康〔隋〕』,『李勣〔唐〕』,『与子言 房彦謙〔隋〕』,『寄兄子詩 杜牧〔唐〕』,『庭誥 顔延之〔宋・武帝〕』,『名子説 劉禹錫〔唐〕』,『中枢亀鏡 蘇瓌〔唐・中宗〕』

〔巻五〕全23章

『蘇丞相 訓子孫詩〔北宋 蘇頌〕』,『邵康節 戒子〔北宋〕』,『孫宣公〔北宋 孫奭〕』,『陳師德〔宋 陳定〕』,『胡翼之 遺訓〔北宋 胡瑗〕』,『劉彦冲〔南宋 紹興年間通判 劉葷〕』,『張忠献 遺令〔南宋 張浚〕』,『范魯公 戒従子詩〔北宋 建隆年間宰相 范質〕』,『与兄書 晏元献〔北宋 康定丞相 晏殊〕』,『責弟書 杜正献〔北宋 慶暦丞相 杜衍〕』,『戒子姪詩 韓忠献〔北宋 嘉祐丞相 韓琦〕』,『書示子 欧陽文忠〔北宋 欧陽脩〕』,『唐質粛〔北宋 天聖侍御史 唐介〕』,『与子書 韓忠憲〔北宋 景祐参知政事 名億 字宗魏〕』,『名不二説 蘇先生〔北宋 蘇洵),『訓子孫文 司馬文正〔北宋 司馬光〕』,『張無尽〔北宋 紹聖執政 張商英〕』,『戒子弟言 王文正〔北宋 景德丞相 王旦〕』,『戒子言 高瓊〔北宋 景德大将〕』,『唐既〔北宋 元符隠士 字潜〕』,『家訓 楊文公〔北宋 天禧翰林學士 楊億〕』,『江端友〔靖康初進士〕』,『庭戒 宋景文〔北宋 嘉祐従臣 宋祁〕』

〔巻六〕全17章

『家戒 黄太史〔北宋 黄庭堅〕』,『家庭談訓 梁况之〔北宋 元祐執政〕』,『唐子滂〔字恵潤〕』,『皇考戒 柳開〔北宋初 開宝六年進士〕』,『示子詩 王禹偁〔北宋)〕』,『張太史〔北宋 元祐史官 名耒 字文潜〕』,『戒子孫 賈文元〔北宋 慶暦宰相〕』,『戒子弟 黄庭堅〔北宋〕』,『関澮〔北宋 政和中書〕』,『范文正〔北宋 范仲淹〕』,『戒子弟言 范忠宣〔北宋 范純仁字堯夫〕』,『鄒忠公〔北宋 元符）諫臣 名浩 字志完〕』,『胡文定〔北宋～南宋 胡安国〕』,『送終禮 高司業〔南宋 紹興従臣 高閌〕』,『教子語 家頤〔字養正 眉山人〕』,『示子辞 何耕〔宋　字道夫 号恬菴〕』,『童蒙訓 呂舎人〔北宋 呂本中〕』。

〔巻七〕全35章

『母訓 戒子言 鄒孟軻母〔『烈女傳』〕』,『敬姜』,『楚子発母』,『師春姜』,『孟仁母』,『厳嫗〔漢 号万石 厳嫗子延年〕』,『陶侃母〔晋〕』,『許善心母〔隋〕』,『崔氏〔隋・唐 大卿鄭善果母〕』,『李景讓母〔唐 浙西観察使〕』,『責子言 田稷子母〔斉〕』,『問子言 雋不疑母〔漢 京兆尹〕』,『答子言 習氏〔呉威遠将軍李衡妻〕』,『張鎰母〔唐 乾元殿中侍御史〕』,『戒子言 董昌齢母〔唐 元和〕』,『孫氏〔孫権族孫女〕』,『崔元暐母〔唐 益州都督 崔博陵〕』,『陳夫人〔北宋 淳化判三司 新淦人〕』,『何氏〔北宋 真宗 名臣伝 陳堯咨母〕』,『戒女書 李氏〔宋 建炎〔趙〕〕,『告子言 叔向母〔晋〕』,『謂子言 李絡秀〔晋 安東将軍周浚妾〕』,『宋氏〔晋 韋逞母〕』,『王孫賈母〔斉 大夫〕』,『別子言 范滂母〔後漢 滂字孟博〕』,『戒兄女言 庾衮〔晋〕』,『勉子言 劉氏〔晋 何無忌母〕』,『女戒 荀爽〔後漢〕』,『女訓 蔡邕〔後漢〕』,『班昭〔後漢〕』,『程暁〔魏〕』,『李晟〔唐〕』,『戒公主 太祖皇帝〔魏〕』,『北宋 張載〕』。

〔巻八〕全１章

『弁志録 呂太史〔南宋 呂祖謙〕』。

『戒子通録』を収める『四庫全書』の提要（解説）では，『戒子通録』は当初『永楽大典』に収められており，『四庫全書』の編集者はそこから抜き出して原本の形を推定しながら八巻本に編集し直したとある。『永楽大典』は何度も戦争や火災などの被害に見舞われており，現存する『永楽大典』には『戒子通録』は残っていない。ともあれ明代に『永楽大典』が編集された時点では『戒子通録』は残っていたということである。また明代のブックリスト『文淵閣書目』『秘書書目』『晁氏宝文堂書目』にも『戒子通録』の書名を確認できる。

元代人虞集らの序文によれば，虞集は金溪において『戒子通録』を重刻し，また眉山，廬陵，河東の各地でも印刷出版されたことが確認できる。南宋から元を経て明に至るまで，かなりの広範囲で『戒子通録』が読まれていたことがわかる。

『戒子通録』全体の構成は以下の通り。

第一巻：『列女伝・胎教』から始まり，ついで『礼記』内則・名子辞，『儀礼』冠辞・婚辞などの経書の引用，それ以後は古代から唐代に至るまでの訓戒から成る。初めの数条は子供が生まれる前，生まれた後の命名，成人の儀礼，婚姻の儀礼と，人の成長に合わせた配列になっている。全二二葉

第二巻：『顔氏家訓』と劉玭『序訓』の二著からしか引用していないが，『顔氏家訓』から十四葉半，『序訓』からは十九葉半，合わせて二四葉とかなり大部なものとなっている。

第三巻：魏晋南北朝の訓戒を中心に構成されている。全二六葉。

第四巻：唐代の訓戒を中心に構成されている。全二十葉半。

第五巻：宋代の，つまり劉清之にとっての同時代の訓戒を中心に構成されている。全二十五葉半。

第六巻：第五巻と同じく宋代の訓戒を中心に構成されている。最後の呂本中の『童蒙訓』からの引用は二一葉にも渡る。全三五葉。

第七巻：古代から宋代に至る女性の訓戒を収める。全十九葉と五行。

第八巻：宋代人である呂祖謙が収集した古今の訓戒から成る。宋代と正史からの採録が比較的多い。全二四葉半。

巻ごとの長さはほぼ統一されているものの，各条は長さも揃っておらず，内容が重複しているものもある。全体の配列は『四庫全書』の編者が行ったのであろうが，原著からの取捨選択は劉清之自身の手になるはずである。そしてこの書物を読んだ大概の読者は，多くの家訓がただ並列されただけだと感ずるに違いない。

その傾向は特に第四巻，第五巻と第六巻の唐～宋代の訓戒を集めたところに顕著である。

例を挙げてみたい。

人には仁義礼智が必要であるという儒教倫理を様々な角度から説いている文章群である。

「子に孝を求めるには，まず親が慈を示すべきだ[25]。」（巻四・顔延之）

「父が孝行者であれば，子も必ず孝行者である。教えずとも孝となるものだ[26]。」（巻五・張無尽）

「忠孝が人に備わっているのは，衣食が片時も人と切り離せないようなものだ[27]。」（巻四・劉禹錫）

「人の家は兄弟の間でも義が必要である[28]。」（巻六・柳開）

人の貧富は時の運だと述べる。

「心を存して公を尽くせば，神明が自然と助けてくれる[29]。」（巻五・欧陽修）

「仕官窮達には，時の命運というものがあるのだ[30]。」（巻五・唐介）

「子弟の賢不肖は人によるが，貧富貴賤は天による[31]。」（巻六・家頤）

「学業の責任は自分にあるが，富貴は時の運である。自分の責任であれば努力しなければならないし，時の運であれば静かに待つほかない[32]。」（巻六・何耕）

善を好み悪を憎むことを説き，忠孝を説き，家族の和睦を説き，修身を説き，利他を説き，節倹を説く，それらが立場を換え，言葉を換えて何度も何度も説かれる。よりシンプルに整理して記述することは可能であるし，朱熹との共著『小学』は実際そのように編集されている。ここで両者の構成を比較してみたい。『小学』の構成は次のようになっている。

内篇：〈立教第一〉〈明倫第二〉〈敬身第三〉〈稽古第四〉
外篇：〈嘉言第五〉〈善行第六〉

内篇は経書の引用を中心に儒教的な倫理を説き，外篇は漢代以後の様々な言行録を採取している。内篇と外篇は理論編と実践編といった関係に近いかもしれない。外篇は宋代人の言葉や文章を多く収め，『戒子通録』と重複する部分も少なくない。後に見る朱熹との書簡のやり取りからして『小学』の編纂に係わった劉清之が，自分でも同系統の書物を編んでみたくなったと考えてよいかと推測される。そしてできあがった『戒子通録』は『小学』と全く異なった構成となったのである。『小学』がテーマごとに厳密に言葉を選んで立体的に構成されているのに対し，『戒子通録』の方はテーマによる分類もなく，類似の言葉が平面的に並んでいるだけである。『小学』の編纂に深く関わった劉清之はあえてこのようなスタイルを選び取ったと考えざるを得ない。だとすればその理由はどこにあったのだろうか。

3. 編集者としての劉清之

ここで一旦『戒子通録』から離れて，劉清之が行った様々な編集作業について見ておきたい。本稿冒頭にも記したが，劉清之が名を知られているのは，朱熹と共に『小学』を編纂したからであるが，実は彼は朱熹と他の書物も編纂しているし，他の人とも，そして一人でも，と多種多彩な編集活動を行っているのである。それをここで確認しておきたい。

3. 1　朱熹との編集活動

劉清之と朱熹の二人は様々な書物の出版を計画し，実行に移していた。朱熹の文集『晦庵先生朱文公文集』に収録された書簡からその一端をうかがうことができる。時系列に沿って配列してみた[33]。

・1171 年：劉清之は朱熹に，江西の高安において『太極説』が印刷されたものを見たと報告した[34]。『文集』巻三二「答張欽夫仁疑問」

・1177 年：『小学』の編集に際し，劉清之が引用した馬援，范純仁の学問態度に対して批判した[35]。『文集』巻三二「答張敬夫」一

・1179 年：朱熹は『五君子祠堂』の出版を計画し，劉清之に「周濂溪祠記」の印刻を依頼した[36]。『文集』巻三四「答呂伯恭」七三

・同年：朱熹が「白鹿洞賦」を執筆する際に，劉清之が故実を採取してきた[37]。『文集』巻一「白鹿洞賦」

・1181 年：朱熹は劉清之の編纂した『曽子』のために序文を書いた。『文集』巻八一「書劉子澄所編曽子後」

・1185 年：朱熹は劉清之への書簡の中で「今回の『小学』の改訂を見たが，古今の故事を増量し，冒頭の部分を最後に回して，初学者が本を開いたらすぐに役立つようにする。そして最後に周子，程子，張子らによる教育論と，村落の取り決めである郷約や雑儀などを置いて下篇とし，全六章にする」と述べた[38]。『文集』巻三五「与劉子澄」十二

・1186 年：『小学』刊行後，朱熹は劉清之に「『小学』を刊行できたことは喜ばしい。たださらに中身を増損できればなおよい。史伝中の嘉言善行や近世の諸先生方の緊切なるお教えをまだ載せ切れていないので，補填できればさらによくなるのだが[39]」と述べる。『文集』巻三五「与劉子澄」十四

・1188 年：朱熹は劉清之が編纂した『女戒』と『家訓』を読み，意見を述べた[40]。『文集』

巻三五「与劉子澄」十五

以上確認できた限りでも，1171年から1188年に至るまでの十八年間，二人は共同で書物を編集し，また意見を交換し合っていたことがわかる。そして1188年の書簡に見える『家訓』こそ，まさしく『戒子通録』のことであると思われる。劉清之が亡くなるのは翌々年の1190年であるから，この書以外に該当する書物がみられないからである[41]。

3．2　その他の人との編集活動

呂祖謙の書簡には以下のような書簡が収められている。

・1173年：呂祖謙が張載の文集『横渠集』の刊行を計画し，版木を数枚刻していたところ，劉清之が成都に張載の子孫が住んでいて最もよい形の「誨諭」を保存しているとの情報を聞いてきたので，作業を一旦中止して早速人を派遣させた[42]。『東萊別集』巻七・尺牘一「与汪端明」

・朱熹に宛てた書簡の中で，北宋の道学者達の書物を出版するという話題の中で「『太極説』が江西の高安に来るのを待って，その版木を劉清之に保管させるべきだ[43]」と述べる。『東萊別集』巻七・尺牘一「与朱侍講[44]」

・『横渠集』の善本がないことを苦慮した呂祖謙は子供らを手伝いに使って校訂作業を行った。劉清之が，「江西の贛州に本を出版したい者がいますから，私が持っていって版木に彫らせましょう」と申し出た[45]。　同上

3．3　個人的な編集活動

劉清之が個人で編集・出版した書物については以下のようなものが挙げられる。

・羅願（1136-1184）の遺稿を劉清之がまとめて『鄂州小集』六巻として刊行した。『鄂州小集』提要

3．4　書籍収集者としての劉清之

・劉清之の父滁のいとこに高名な学者である劉敞（字原父，号公是1019-1068）・劉攽（字貢父，号公非1023-89）兄弟がいる[46]。周必大『文忠集』には，劉清之・靖之兄弟が周必大のもとを訪れて，家に所蔵する劉敞・劉攽の文集や詩について，さらに劉敞の息子である奉世の原稿に跋文を依頼するくだりが書かれている。

以上，劉清之が書物の収集者として，編集者として並々ならぬ情熱を持って活動していたことがわかった。

唐代に登場した印刷術は，宋代に至って大いに発展，普及する。それにともない中国各地で本が出版され始めるようになる。人々は自分や父祖の，師の著作を出版しようとし，それを請

け負う書店も生まれてくる。北宋の有名な文学者である蘇軾は，自らの詩文集が勝手に編集・出版され販売されていることに不満を述べている[47]。そして彼が生まれ，そして出版・講学活動の場としていた江西という土地は，また出版文化の盛んな地域でもあった[48]。

さらに書物を収集するという彼の志向は先祖伝来のものでもあった。彼の曽祖劉式には数千巻に及ぶ蔵書があり，夫人である陳氏はそれを「墨荘」と名づけた。一度荒廃した墨荘を劉清之の父親は再建し，劉清之はそれを受け継いだ[49]。朱熹や多くの士大夫がこの墨荘を訪れて，詩文を作るなどして交遊を計った[50]。劉清之の著書の中にあった『墨荘総録』とはおそらくこの墨荘に所蔵された書籍の目録だったのであろう。

4.「編集」の思想

先に劉清之が『戒子通録』を編集するに際して，似たような内容を持つ『小学』と意図的に違う構成にしたのではないか，という疑問を呈した。それは『小学』が童蒙訓的な性格を持ち，『戒子通録』が家訓集であることと関係があるのだろうか。ここで今一つの比較対象として司馬光の『温公家範』を挙げてみたい。この『温公家範』は過去の様々な家訓を抜粋して編集されているという点において『戒子通録』と同様の作業を経て成った書物である。『温公家範』の構成は以下のようになっている。

・巻一：『周易・家人卦』，『大学』，『孝經』，『書経・虞書，堯典』，『詩経・大雅・文王之什・思斉』〔治家〕『春秋左伝・隠公三年』，『春秋左伝・昭公二六年』，『礼記・内則』，『春秋左伝・僖公二二年』，『国語・魯語下』『漢書・巻四六・万石衛直周張伝』

・巻二以下の構成：巻二 祖 / 巻三 父母 / 巻四 子（上）/ 巻五 子（下）/ 巻六 女 孫 伯叔父姪 / 巻七 兄 弟 姑姊妹 夫 / 巻八 妻（上）/ 巻九 妻（下）/ 巻十 舅甥 舅姑 婦 妾 乳母

『易』の家人の卦から説き起こし，経書と評価の定まった古典の引用がそれに続く。第二巻からは，家族それぞれに対する訓戒が書かれるが，その順序は「祖・父母・子・女・孫・伯叔父・姪・兄・弟・姑姊妹・夫・妻・舅甥・舅姑・婦・妾・乳母」となっている。つまり家族の中心から周縁へと徐々に移っている。『易』によって家族の原理を説き，次いで権威ある経典の家族に関する言葉を配置し，次に個々の家族への訓戒へと移るという構成になっている。ここから，『温公家範』は，完全に体系的な構造を備えているといえる。劉清之は本書を目にしただろうか。『戒子通録』に（『温公家範』ではないものの）司馬光の「訓子孫文」を採録しているのだから参考にしなかったはずはない。『温公家範』ほど厳密ではなくても，『袁氏世範』や『家訓筆録』[51] など他の家訓集も程度こそあれ，一定の構造を有している。

『戒子通録』の構成を今一度見直してみたい。

第一巻は経書の引用，それ以後は古代から唐代に至るまでの訓戒から成り，第二巻は『顔氏家訓』と劉玭『序訓』の二著からの引用，第三巻は魏晋南北朝の訓戒を中心に構成，第四巻は唐代の訓戒を中心に構成され，第五巻と第六巻は宋代の訓戒を中心に構成されている。第七巻は古代から宋代に至る女性の訓戒を収め，第八巻は宋の呂祖謙収集による古今の訓戒から成っ

ていた。一巻から六巻までは，古代から宋代へと時代が下るように構成され，七巻は女戒のみ，八巻は番外篇として同時代の家訓集を採録，と一見一定の構成はあるようにうかがえる。ここで次の朱熹が劉清之に宛てた言葉を紹介したい。

「以前見せてもらった『家訓』ですが，大体完成されているように思えます。ただ引用文の選択について，もう少し経・史・子・集（などの古典）を増やし，経書を前に置き，（分量は）必ずしもこんなに多くはいらないでしょう。精選していけばもっとよくなります。」[52)]

朱熹のアドバイスに従って劉清之は『戒子通録』を改編したのであろう。改編前の姿を復元するには朱熹の言葉を逆にたどっていけばよい。まず第一巻ははずす。第二巻は量の不自然さからして原形のままかもしれない。第三巻は『芸文類聚』から取ったものがかなり見受けられる。朱熹のアドバイス通りに古典から，しかも手近なところから採録したのであろう。残るは第四巻以降の唐宋の家訓および「女戒」である。「3．1」における朱熹の1188年の書簡に「劉清之の『女戒』と『家訓』を読み異議を唱えた」とあったことからも「女戒」は劉清之の手になるものだと考えられる。

『戒子通録』の当初の姿は，唐宋の家訓と「女戒」が内容の重複も厭わず，ただただ平面的に並置されている，といったものになる。

唐宋の文を中心に採用しているということは，すぐに役立つことを求めたのではないだろうか。千年以上前の経書では，目の前で起こっている様々な現代的問題にただちに対処できない。「女戒」に関する朱熹の意見には「まだ完全でなく，内容も浅いから，『小学』のように古典から言葉を引いてくるとよい[53)]」とある。劉清之の念頭にあったのは，やはり「ただちに役立つ家訓集」であったと思われる。

『小学』のような内容上の分類もせず,『温公家範』のような立体的な構造も持たず,『戒子通録』は,「初めと終わり」や「中心と周縁」を持たず，全体のバランスも取れていない極めて特異な形態を持った書物として姿を現してくる。

今ひとつの特徴として挙げられるのは，他人の家訓集をそのまま自分の家訓集に採録している点である。第六巻末尾に採られている呂本中の「童蒙訓」と第八巻全体を占める呂祖謙の「弁志録」は，両方とも彼らが編んだ家訓集である。他人がそれぞれの視点で編纂した家訓を取り込めば，統一性がより取れなくなることは容易に想像できよう。

朱熹が「必ずしもこんなに多くはいらない」と評したように，劉清之の編集に際しての基本的な姿勢は「とにかく現代文の量を多く取り入れること」そしてそれを「あえて並列させること」であったであろう。

終わりに

ここまで宋代に多く編纂された家訓集の一つである『戒子通録』について，作者の劉清之という人物像から，また書物の構成から検討を加えてきた。その書物としてのあり方がどれほど特異なものであったかはもう繰り返す必要はないであろう。

『戒子通録』を収める『四庫全書』の提要の執筆者でさえ，本書は「編採は繁富であり，冗雑を免れない[54]」と評している。「しかし」とこの執筆者は続ける。この書は「様々な事象に対して，教えを示す」ことができ，「委曲をはばかることがない」それゆえに「こまごまとした言葉」に至るまで「勧戒の語でないものはない」と。そしてこの「過多は何ら欠点ではない」のだと。

ここで我々が読者になって原初の『戒子通録』を手にしてみることにしたい。

「孝」について何か指針を得たいと思ったとする。書物を開くと，そこには様々な人による「孝」についての言葉が並んでいる。我々は我々の抱えている問題に対して，その中から一番適しているアドバイスを選ぶことができる。たとえ適切な答えがなかったとしても，いくつもの意見を参考にすることができる。

答えを一つしか書いていない家訓集では，我々はその言葉を押し頂くか，もしくは反発するしかない。

一つの問題に対して複数の回答を並列させること。自分の思想を，理路整然とした態度で示す行為とは正反対のことを，劉清之はあえてしてみせたのだ。強いて言えば「編集」の中に自らを拡散させることが，劉清之の「思想」だったといえよう。このようにして作られた書物を「哲学者」である朱熹が「鄙俗で表層的」だと考えるのも当然であろう。劉清之は自らの思想を伝えるために『戒子通録』を編集したのではない。そのまなざしの先には，現実の様々な問題を抱えて，その解決のヒントを求めて喘いでいる読者がいるのである。出版というメディアが中国において勃興し始めた宋代，その中でも劉清之の生きた江西地方は出版文化の盛んな地域の一つであった。ゆえに彼のような存在がやがて登場するのは必然だったともいえる。

ここ数年，家訓集が中国や台湾で続々と出版されている。それらの書物の多くが『戒子通録』を参考に編集されており，また引用されている。そしてそれら書物の中で『戒子通録』はバラバラに解体されて，あちこちに散在している。もしかしたら『戒子通録』は，現代に至ってようやくその本来の効果を発揮し始めたといえるのかもしれない。

注

1）『笪橋劉氏総譜』（劉桂芳等主修，全十四冊，鉛印，江西笪橋安成堂，1947 年。上海図書館蔵）に基づく。劉清之自身に関しては『宋史』巻四三七・列伝一九六・儒林七を参考。

2）次子の劉成季が進士に及第したことは確認できるが（嘉定『同治清江県志』巻七），孫（晋之）の代以降については不明。

3）解縉（1369-1415　江西吉水の出身）は，劉清之の弟子である解斉賢（『宋元学案補遺』巻五九）の後裔。彼の文集『文毅集』には，解氏の先祖が代々劉清之の学を受け継いでいたことを述べる文章が散見される。

4）中国では，各一族が web サイトを運営し，一族の結束に用いている。劉氏一族も同様で，祠廟についての情報もそれに負っている。

5）『宋史』巻四三七・列伝一九六・儒林七

6）『宋史』巻四二九・列伝一八八・道学三・張栻にも以下のような記述がある。「史正志は発運使であり，名は均輸という。州県の財賦を尽く奪っており，遠近は騒然，士大夫たちも争ってその害を訴えた」とある。

7）周必大も劉清之と同じく江西（廬陵）の出身。劉清之の死を看取った。彼の文集『文忠集』には劉清之やその親族に関する記述が数多く見られる。

8）『同治臨江府志』巻七

9）朱熹と会う以前に何を学んでいたかは史料がないため明らかではない。伝には「兄の劉清之に学んだ」とあり，靖之は経書の訓詁から近世諸儒の諸説まで学んでいたとされている（『宋元学案』巻五一九清江学案，劉靖之）。それ故兄について学んだ劉清之もそれを継承していると考えてよいかと思う。

10）『宋元学案』巻四六では彼を筆頭とする「玉山学案」が立てられている。

11）劉清之の活動していた清江は江西（当時は江南西路）の北部中央に位置し，陸九淵は江西の北東部の金渓を本拠地としていた。

12）この『玉淵文稾』は，その一部が『永楽大典』に残っている。

13）『文献通考』巻一〇三

14）嘉慶『衡陽県志』巻三八

15）『宋元学案』に収められた劉清之の文章は,『宋史』『宋名臣言行録外集』『麟原前集』巻九「静春先生伝」からの引用からなる。

16）「劉子澄言，本朝只有四篇文字好。太極図，西銘，易伝序，春秋伝序。」『朱子語類』巻一三九・第四二条・論文上

17）「常曰，苟志於学而乃唯性理文書是伝是玩，善士大夫是攀是慕，与向来眩于文章，溺于訓詁，流于異教者同一轍也。」『宋名臣言行録外集』巻十四

18）「従学士真儒，考徳問業，則曰是好名者。経師易遇，人師難遭。」『宋名臣言行録外集』巻十四

19）「其教先生（韓冠卿を指す）也，以一実字。」『宋元学案』巻五九

20）代表的なものとして,柳開（947-1000）『柳氏家戒』,趙鼎（1085-1147）『家訓筆録』,葉夢得（1077-1148）『石林家訓』，袁采（1140-1195）『袁氏世範』，陸游（1125-1209）『放翁家訓』，真徳秀（1178-1235）『教子齋規』等が挙げられる。これはほんの一部である。

21）族譜については，小林義廣「欧陽脩における族譜編纂の意義」（『欧陽脩　その生涯と宗族』創文社，2000年）を，義荘については，遠藤隆俊「宋代蘇州の范氏義荘について」（『宋代史研究会研究報告集第四集 －宋代の知識人』，汲古書院，1993年）を参照。

22）宋代全般における家訓の出版状況・内容分析・背景については，かつて論じたことがある。緒方賢一「家訓に見る宋代士大夫の日常倫理」『宋代史研究会研究報告集第七集　宋代人の認識 －相互性と日常空間』（汲古書院，2001年）。

23）生没年不詳。蘇轍（1039-1112）によるかなり長文の序文のみ残る。

24）この虞集の序文によれば，元代には陸九淵の学の本場である金渓でも劉氏一族が活躍していたことが確認できる。

25）「欲求子孝，必先慈。」

26）「父孝，子必孝。不教亦須孝。」

27）「夫忠孝之於人，如食与衣不可斯須離也。」

28）「人之家，兄弟無不義。」

29）「但存心尽公，神明自祐。」

30）「仕宦窮達，各有時命。」

31）「子弟之賢不肖係諸人，其貧富貴賤係之天。」

32）「学業在我，富貴在時。在我者不可不勉，在時者静以俟之。」

33）書簡の年代測定は陳来『朱子書信編年考証』（上海人民出版社，1989年）を参考とした。

34）「又劉子澄前日過此，説高安所刊『太極説』見今印造。」

35）「子澄所引馬范出処，渠輩正坐立意不強而聞見駁雑，胸中似此等草木太多。」

36）「熹昨拝書，以『五君子祠堂』記文為請，……「濂渓祠記」荊州已寄来矣，已属子澄書而刻之。」

37）『白鹿洞賦』本文の割り注に「劉清之子澄亦褒集故実来寄」の一文がある。

38）「『小学』見此修改，益以古今故事，移首篇於書尾，使初学開巻便有受用，而末巻益以周，程，張子教

人大略及郷約雑儀之類別為下篇，便定著六篇。」

39)「『小学』能為刊行，亦佳。但須更為稍加損益乃善。・・・中略・・・史伝中嘉善行及近世諸先生教人切近之語，亦多有未載者。更望刷出補入，乃為佳也。」

40)「向読『女戒』，見其言有未備及鄙浅書。…向見所編『家訓』，其中似已該備…。」

41）この「家訓」がいつから『戒子通録』と呼ばれるようになったのかは現在の所不明。

42)「少稟，近欲刊『横渠集』已数板矣。而子澄具道，嘗聞誨諭在成都，所伝得於横渠之孫最為詳備。今即令輟工専遣人往拝請。」

43)「『太極説』竢有高安，便当属子澄収其板。」

44）朱熹のこと。

45)「此間方刊『横渠集』，断手当首，拝納説文，苦無善本，見令嗣説，過多讐校。昨見劉子澄説，贛州方欲刊書，自可径送渠令鋟木也。」

46)『中国思想辞典』（日原利国編，研文出版，1984 年）によれば，劉敞は『春秋』研究を一変させたと言われ, 劉攽は司馬光と一緒に『資治通鑑』を編纂したことで知られる。また『臨江府志』巻六では「臨江の二劉」と称えられている。二人及び奉世は『宋元学案』では欧陽脩を筆頭とする廬陵学案に置かれている。

47）井上進『中国出版文化史』（名古屋大学出版会，2002 年）

48）張秀民『中国印刷史』（浙江古籍出版社，2006 年）

49)『晦庵先生朱文公文集』巻七七「劉氏墨荘記」を参考にした。

50）この墨荘はその後も荒廃を繰り返しつつも劉氏一族の心の拠り所となり続けた。それは現代にまで及んでおり，今は職業訓練学校という姿を取りつつも，学問の場としての命脈を保っている。（参考，許懐林〔江西師範大学〕「伝統与現代　従劉氏墨荘到培根職業学校的変遷」摘要，「2006 年族群・歴史与文化亜洲聯合論壇：人物与地域研究検討会」）

51)『家訓筆録』が『温公家範』を参考にして作成されていたことを柳立言氏は指摘している。（「従趙鼎『家訓筆録』看南宋浙東的一個士大夫家族」『宋代的家庭和法律』上海古籍出版社，2008 年）

52）原文は「向見所編『家訓』，其中似已該備。只就彼采択，更益以経・史・子・集中事，以経為先，不必太多，精択而審取之尤佳也」『晦庵先生朱文公文集』巻三五「与劉子澄」十五

53)「向読『女戒』，見其言有未備及鄙浅処，伯恭亦嘗病之。間嘗欲別集古語，如『小学』之状，為数篇。」『晦庵先生朱文公文集』巻三五「与劉子澄」十五

54)「提要」の原文は第 2 節に全文を載せている。